



佐倉といわれて直ぐ気付いたのは、黒川紀章の初期作品「佐倉市庁舎」が、どうなっているかであった。歴史民俗博物館を、出来て早々見に来た折に、高台に聳えるその市庁舎を、ちらりとバスの窓から見て「あ、ここにあったのか」と思ってから、あれがどうなっていたか知りたかったのである。もうひとつはこれも初期作品だが、原広司「下志津小学校」の存在が気になった。この方はまったく見たこともなかったが、有孔体理論の実現として、当時の雑誌が華々しくとり上げていたのを思い出していたからであった。かなり切迫したスケジュールの中に割り込ませることは気が引けたが、案内者は実に見事に時間配分をしていた。どこにあるのか、下志津とはどこなのかも知らずにいたが、道順に従ってこれを視察企画の中に含めたのである。

「佐倉市庁舎」一九六九年の作品、構造は松井源吾研究室、設備は桜井設備、一流を揃えて立ち向った所が黒川らしい。地上六階延七二〇〇㎡、施工安藤建設であった。黒川はそれまでに「寒河江市庁舎」を経験していたし、同じ山形で「ハワイドリームランド」をつくっていた。しかもその翌々年一九六八年には、大阪万博で「タカラパビリオン」と「空中テーマ館」に参加し、同じ頃御殿場に「小田急イン」という、からくり建築を着々とつくり、三六才でありながらすでに意気揚々、飛ぶ鳥を落とす勢いであった。だからこそこの公共建築への挑戦は、並々ならぬものがあったと思う。

それにしても今は人口一五万の佐倉市が当時約四万人

できるという内訳が、見えてこなかったのである。常に新しい技術と、新しい空間づくりに専念してきた建築家の足跡を知っているわれわれだが、その一方で「ハワイドリームセンター」の俗悪な、うねったプールや形には、顔を背けてきた。また万博の「タカラパビリオン」の、何ともいえない組立細工にも、新しい実験ということ以外のものを感じていた。

そしてこの庁舎では、内部空間、機能空間の実行という利用者の感覚をやや犠牲にしても、世界的インターナショナル・スタイルのレベルへの参加を果たしていた。また空間の矮小化や、シェル構造の稚拙さを別にすれば、プレハブ、ボイドスラブのリフトアップという、日本では未だ実験段階であった技術を克服して、三〇年の風雪に耐えるものを残していたのを、認めないわけにはいかなかった。当初建てられた時は、コンクリート打放しの色であったに違いない。今は白く塗られて外観はややさっぱりとして、汚れを落として明快な姿にしていたように思われる。それは追加工事だった筈だが、庁舎前の駐車場を越えた所に設置された、「忠霊塔」のシェルを見れば分かる。そのシェルは詳しくは見なかったのだが、立体的にされた打放しコンクリートで、まったく汚れたコンクリートの残骸としか見えなかった。

世間の素人の人びとが建築家を数える時、殊にこの万博前後の時代では、丹下健三の弟子の黒川紀章がいつもトップに指折られていた。名前を知っている建築家は、日本ではそれ位であったかもしれない。この傾向は今で

の時代に、よくこれだけの技術的な建築を理解し、機能主義の実直な表現をそのまま受け入れたものだ、今回初めて感心した。その立面からも明瞭に読み取れる四本のコアシャフトの六階までの立ち上げ、その間にプレハブリケーションによる、中空スラブをリフトアップしてつなげ、そのままオフィス空間化してしまっている。天井の低い中空スラブ間の押し詰められた中で、よくぞ三〇年間もこの庁舎に働く人びとが、我慢してきたものだと、うたた感概にふけた。そのことは吹抜けといわれるほどでもない、人口の市民ホールでもいえた。階段とサンクンフロアとメザニンとが、案内デスクや展示と渾然一体となつて空間をつくり、何とも最小限の機能空間分割と見た時も、同じである。さらに議場への狭い通路や、無理に四五度に曲げた平面上のモジュールに従う、機能室の配分を見た時も同じであった。長い間、市民も中に勤務する人も、我慢してきたのだろう。そして当時は人口も少なかったから、これで良かったのだろうとも考えた。

このことは再び外へ出て見た、シェル構造による議場の場合も同じであった。残念ながら議場の内部は見えないから、うかつなことはいえないが、少なくともこのシェルは、内部空間を想像するには残酷に過ぎた。小さいのである。議員が少ないといっても、議場をここに押し込めていること自体が無理に、外観からは見えたのである。ここには建築家の技術と革新と試案だけが見えて、内部空間をシェルという、新しい大らかな構造で豊かに

も続き、最近では磯崎新の方が有名になってきたが、社会的な知名度が高く顔写真の出る回数からいってはまだ黒川だろう。社交的にも出版された「共生」の内容からいっても、ポピュラーな度合いは高い。多くの作品をつくり、海外でも大いに活躍し、最近ではインドネシアの空港までつくりながら、何故か日本の建築家の間の評価が低い。これは彼の性格によるものか、作品の程度によるものか、彼の一般的知名度への建築家のやっかみからくるのか、よく分からない。

早い話が、銀座と築地の中間に建つ「カプセルタワー（中銀タワー）」を考えると、少しは分かってくる。この完成は一九七二年で、彼の理論のひとつの集大成であったかもしれない。コアにプレハブの箱をとりつけて、鳥の巣状にまたは樹木の上の巣箱のように、寝室カプセルをつけるという、とびきりの技術とアイデアの実現は実は世界でも珍しく、だからこそチャールズ・ジェンクスのような評論家が、日本のモダニストに数え挙げた。その昔、一九六〇年代のメタボリズムグループにも入って、若い時から建築運動を始め、一貫して彼の最新技術導入と挑戦が続いた。このカプセルマンションにしても、現在もまだ建っているし、時々一般誌でも話題になるのである。今では賑やかになってきた築地界隈の、ランドマークにもなりつつある。これは「佐倉市庁舎」でも同じであろう。だが中々定着しないのは、建築というものが新しい技術や、手法だけではないことを皆、知っているからではないのか。

(続)

